島崎藤村全集 16

島崎藤村全集 16

島崎藤村全集 16

昭和三十一年九月二十五日 発行
定価 二〇〇円

著者 島崎藤村
東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者 古田晁
東京都三鷹市上連雀九九〇
印刷者 勝畑四郎
東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房
電話 東京(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

印刷 株式会社三省堂
製本 株式会社高陽堂

新生

第二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

一

三年近い月日が異郷の旅の間に過ぎた。遠い島にでも流された人のように自分の境涯をよくたとえてみた岸本は、自分で自分の手錠を解き腰縄を解く思いをして、わびしい自責の生活から離れようとしていた。

帰国の日も近づいて来た。クリスマスの前にはすでに来るはずであったその日も半年ほど延びて、旅で迎える三度目のあの祭と、翌年の正月とをも、岸本はパリの下宿のほうで送った。あの仏国汽船でマルセーユの港にたどり着き、初めてフランスの土を踏んでみたころから数えると、もはや足かけ四年にもなる。国を出た当時の彼の決心から言えば、まったくうしろを振り返って見ないで、知らない土地へ行き、知らない人の中へはいり、そして心の悲しみを忘れようとしたのであって、生きてかえれる日のあるかどうかと言うようなことはまったく考えられもしなかった。ひょっとすると神戸の港も見納めだ。そう思って出て来た国のほうへもう一度足を向けようとすることは、いかにもおめおめと帰って行くような気を起させる。けれども戦時以来旅の方法も尽きて来て、この上の滞在は人に心配をかけるばかりであったし、国のほうに残しておいて来た子供らのこともひどく心にかかった。それに抑制と忍耐との三年近い苦行（？）をまがりなりにも守りつづけて来たことは多少なりとも彼の旅の心を軽くした。彼は出獄の日を待ち受ける囚人のようにして、もう一度国のほうに自分の子供らを見うるの日を待ち受けた。そろそろ遠い旅じたくをも心がけねばならなかった。かばんに入れて国から持って来た和服の中には、部屋着としてよく取り出して着た羽織や着物がある。その中には、亡くなってからもう何年になるかと思われるほどの妻の園子の形見として残った一枚の下着もある。その下着の紺絹のついた裏なぞはすっかりすり切れてしまった。パリに滞在中、東京の元園町の友人の家からわざわざ送り届けてくれたどてらはずい

ぶん役に立って、長い冬の夜なぞは洋服の上にそれを重ね寛濶な和服の着心地を楽しみながら机にむかったものであったが、そのじょうぶなどてらですら裾から白い綿が見えるほどになった。秋の末から春のはじめへかけて毎年のように身に着けた背広の服は国のほうへ持って行かれないほど着古してしまった。彼は赤い着物でも脱ぎ捨てるように、その古い背広を脱ぎ捨てようとしていた。旅の末には、下宿の部屋のよごれも目についた。彼はその長く住み慣れた部屋にも別れを告げようとしていた。ある時は目に見えない牢屋のような思いをしたこともある部屋の石の壁にも。ある時はわれとわが身を抱き締めるようにして、旅の前途を思い煩いながらながめ入ったこともある部屋のガラス窓にも。

「かえるのをゆるされるのだ。」

と彼は自分で自分の帰国のことを言ってみた。

二

帰りじたくをするころの岸本には、なんとなく国も遠くなってしまった。彼は三年近くも見ない自分の子供らの急激な成長を何ほどのものともはっきり想像することすらできなかった。彼の目にあるは旧の新橋停車場で別れて来たままのいつまでも同じように幼い子供らの姿にすぎなかった。ヨーロッパの戦争はまだ続いていて、下宿と同番地の家番の亭主などは出征したぎり、たまに戦地のほうから休暇をもらって帰って来て顔を見せるくらいのものであったが、そこに留守居する家番のかみさんの子供らは驚くほど大きくなった。階段のあがりおりに、岸本はそこいらに遊び戯れているフランスの子供らのそばへよく行った。みんなが幾つになるかということをよく尋ねた。黒い上着に短い半ズボンをはいてすねをあらわしたフランス風の子供の風俗は、国のほうで見るものとは似てもつかな

いようなものばかりだ。でも岸本はそばへ来る子供の青いひとみなぞに見入って、国のほうに自分を待つ泉太や繁の成長を想像した。これから彼が帰って行って見る泉太はもう十二歳、繁のほうは十歳にもなる。

国を出る時子供を頼んでおいて来た節子のことも、泉太や繁の成長を想像すると同時に、岸本の胸に浮かんで来た。下宿のかみさんの姪という人は、かわいそうにあの人の婚約しておいた末頼もしいフランス人も戦地のほうへ行って死んだとやらで、今ではリモージュの田舎のほうに帰っているがあのかみさんの姪がちょうど節子と同年だ。彼女は気味の悪いほど赤く縮れた髪をもった、がんじょうな体格の女で、リモージュからかみさんの手伝いにパリへ出て来たばかりのころはいかにも田舎臭い娘であったが、その人がもう一度田舎のほうへ帰って行くころには見違えるほどパリの風俗を学んで、働き好きな娘らしい手なぞにもさすがに若い女のさかりを思わせるものがあった。背はかみさんよりも高かった。この人を通して岸本はよく自分の姪の成長を想像した。若い娘のようにばかり思っていた節子がもう二十四だ。

節子からのたよりは岸本が下宿を引き揚げる前に届いた。彼女はつつましやかな調子で、叔父さんのために帰国の旅の無事を祈るということや、留守宅の子供もごくじょうぶで叔父さんの帰りを待ちわびているということや、しかし叔父さんが遠からず国に帰ってこの留守宅の様子を見たらどう思うであろうか、それが気づかわれるということなぞを書いてよこした。

「力強いお留守居もできないで、ほんとに御免なさいね。」

こんな言葉もその中に書いてあった。

もはやひところのように恐ろしく神経のとがった、いたいたしい調子は彼女の手紙の中になかった。ことにその最近のたよりは、旅に来て岸本が彼女から受け取ったかずかずの手紙の中でも一番心やすく読めるような、わだかまりのない調子で書いてあった。

「節ちゃんもこういう調子でいてくれるとありがた

い。」

思わず岸本はそれを言ってみた。同時に、その年までまだ身もかため得ずにぶらぶらしているらしい彼女のことが、なんとなく無言な力をもって岸本の胸に迫って来た。

三

国のほうで持ち上がる節子の縁談については、岸本はまったくそれを知らないでもなかった。東京の義雄兄からは、まだそんな話のきまらない前に、一度パリへ知らせてよこしたこともあった。岸本はそのたよりを読んだ時に、節子には早く身を堅めさせたいというあの兄のあせった心を知り、先方の望み手というは毎月六七十円の収入のある勤め人であることを知り、その人が徳川時代に名高かったある学者の子孫にあたるということをも知った。兄はまた、その縁談のまとまることを希望しているとも書いてよこした。その後、兄からはなんの沙汰もなく、節子自身からのおりおりのたよりの中にも何もそのことについて書いてないところを見ると、おそらくその話は立ち消えになったものであろうと思われたが——

こうした消息を胸に浮かべてみるたびに、節子が人知れず産み落とした子供のこと、切開の手術を受けたという彼女の乳房のこと、何事も知らない人がちょっと見たぐらいではわからないまでになったという彼女のからだのこと——否でも応でも岸本の心はそれらの打ち消しがたい隠れた秘密に触れないわけには行かなかった。これから国をさして帰って行こうとする彼は、過ぐる三年近くの間自分の顔をそむけようとし、心の目をふさごうとし、どうかして旅に紛れて忘れよう忘れようとした、その恐ろしいものに面とむかわねばならない。彼は写真の中で見てさえマブしいような義雄兄の前に自分を持って行ってみた。ひとこと世話を頼むとも言えずに子供を置いて逃げ出して来た嫂の前に自分を持って行ってみた。何事も知らずに住み慣

れた郷里を離れて嫂とともに上京したおばあさんの前に自分を持って行ってみた。それから、それらの人たちの集まっている中で、もう一度帰って行って会う節子の前にも自分を持って行ってみた。

岸本は嘆息して、この帰国の容易でないことを思った。しかし、もう一度夜明けを待ち受けるような心をもって、彼はそれらの人たちのほうに向かおうとした。せめてあの嫂だけにはいっさいを打ち明けよう、そしてこれまでのことをわびようと考えた。不幸な節子のためにも自分の力にできるだけのことをしよう、彼女の縁談のことにも骨折ろうと考えた。岸本にとっては、この帰りの旅はすくなからぬ精神の勇気を要することばかりであった。

四

戦争の影響は岸本が泊まっているような下宿にまで及んで、そこから陸軍病院へかよっていた眼科医の客も去り、家庭教師の客も去り、しまいには客は岸本一人になってしまった。食堂もごく寂しかった。諸物価騰貴でヤリキレないとこぼしこぼししていたかみさんが結局そこをたたんで戦争の終るころまでリモージュの田舎へでも引っ込みたいと言い出したので、それを機会に岸本は長く住み慣れた下宿を去ろうとした。そして、何かにつけ旅立ちに便利なソルボンヌ付近の旅館のほうに移ろうとした。

まだ岸本はパリを引き揚げる日取りも定めることはできなかった。遠い旅のことで、国のほうから来る手紙を待つだけにもかなりの日数を要した。旅行も困難な時であったから、途中のこともいろいろ問い合わせてみねばならなかった。それによって帰国の旅の方針を定めねばならなかった。遠く喜望峰を経由して、インド洋から東洋の港々を帰って行く長い航海の旅を選ぼうか。それとも多少の危険を冒し、道々きびしい検閲で旅の手帳を取り上げられるくらいのことは覚悟しても、イギリスから北海を越え、日ごろ見たいと思う

北ヨーロッパのほうを回って、シベリアを通って帰って行く汽車旅を選ぼうか。遠い露領の果のほうには叔父の帰りを待ち受けると言ってよこした輝子（節子の姉）夫婦も住んでいた。いずれにしてもそうやすやすと帰って行かれる時ではなかった。岸本はその二つのうちのどちらの道を選ぼうかということにさえ思い迷った。

パリで岸本が懇意になった美術家仲間の中でも、小竹はすでに国へ帰り、岡はしばらくリオンのほうへ行っていた。例のパスツールに近い画室には岸本といっしょにパリを引き揚げようと約束した牧野がいて、この画家は帰りの旅の打ち合わせかたがたよく岸本の下宿へ顔を見せた。

「国のほうではどういうものがぼくらを待っていてくれますかサ。」牧野を見るたびに、岸本はそれを言わずにはいられなかった。

「留守宅でも困っているんじゃないかと思うんです。帰って行ってみたら、第一その心配をしなけりゃなるまいかと思うんです。」

こう岸本は日ごろめったに牧野の前で言い出したこともない自分の留守宅のほうのうわさをすると、骨の折れる旅を続けて来た牧野はそれを聞いてうなずいてみせた。

「二度とこういう旅をしようとは思いませんね。」

牧野を前に置いて、岸本はつくづくつらいことの多かった過ぐる三年近くの月日を思い出したように嘆息した。

それが下宿の部屋で牧野を見る最終の時であった。岸本は旅館のほうへ行ってから、ほんとうに旅じたくを整えたいと思った。いよいよ頼んでおいた辻馬車が町の並木のわきに来て、仮にまとめた荷物を送り出すという前に、岸本は苦い昼寝の場所であった部屋の寝台のそばへも行き、冷たい壁にかかる銅板画のソクラテスの額の下へも行き、置戸棚の戸に張りつけてある大きな姿見の前へも行った。その部屋を去るころの彼の髪は自分ながら驚くほど白くなっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

五

もはや岸本はパリにじっとしている在留者でなくして帰国の途に上りかけている旅行者であった。ソルボンヌの大学に近い旅館に移ってから、毎日のように彼は用たしに出歩いた。これからロンドンへ渡ろうとする手続きをすますためには、パリの警察署へも行き、外務省へも行き、イギリスの領事館へも行った。国のほうの親しい人たちへのみやげとして、こころざしばかりの品々を捜すためには、古いサン・ゼルマンの並木街なぞを歩き回った。ちょうどセルバンテスの三百年祭も来ていて、あの『ドン・キホーテ』を書いたスペインの名高い作者を記念するための新刊の著述なぞが本屋の店さきを飾っていた。学芸に心を寄せる岸本のような男にとっては、そうした新刊書の目につく飾り窓の前を通りながら、もう黄ばんだ若葉の延びて来ているマロニエの並木の間を行ったり来たりした時には余計に旅らしい心を深くしたのであった。別離を告げるために、彼は日ごろ懇意にしたフランス人の家々をもたずねてみた。どの家をたたいても戦時らしい心持を起させない所はなかった。ビョンクールの書記の家へ行ってみた。そこではもはや老婦人の姿は見えず、細君も留守で、二人の子供が家婢を相手に寂しそうにしていた。プロッスの老教授の家へ行ってみた。そこでは戦地のほうへ行っている若いむすこの一人が負傷したとやらで、教授夫婦は見舞いのために出かけて、家婢が心配顔に留守番をしていた。

いよいよフランスの旅も終りに近いことを思わせるような夕方が来た。岸本は旅館の三階の部屋にひとりこもって古い歴史のあるソルボンヌの礼拝堂のほうから石造の町の建物の間を伝わって来る鐘の音を聞きながら、東京の留守宅あての手紙を書いた。

かねて岸本にはこの旅を終るころになし遂げたいと考えておいたことがあった。パリを引き揚げるころが来たら自分のひげをそり落としてしまおう、そして帰

国の途に上ろうと考えていた。不思議と言えば不思議、突飛と言えば突飛な考えではあったが、心に編笠をかぶる思いをして国を出て来た岸本には別にそれが不思議でもなく突飛でもなかった。何か彼は現在の自分の心を実際に自分の身に現わしたかった。

しばらく岸本は部屋の寝台に腰かけて自分で自分のすることをおしとどめようとしてみた。しかし、かねての思いを遂げる時が来ていた。そこで彼はひげを落としにかかった。部屋には壁に寄せて造りつけた石の洗面台がある。その上に姿見がある。彼はその前に立って、自分でかみそりを執った。惜しげもなくかみそりを動かすたびに、もう幾年となく鼻の下にたくわえておいたやつがゆがめた彼の顔をすべり落ちた。よくも切れないかみそりで、彼はくちびるの周囲のはれ上がるほど力を入れてそった。

かつて国のほうで人を教えたこともある自分の姿のかわりに、ずっと以前の書生時代にでも帰って行ったような自分の姿がそこへあらわれて来た。最後に姿見のほうへ行ってそり立ての顔をながめた時は、今までひげに隠れていた鼻の下あたりが青々として見えた。ところどころからは血もにじみ出た。

岸本の顔はまるで変ってしまった。しかし彼はさもここちよげに、両手で口のまわりをなでまわした。この顔でこそ、もう一度国のほうへ帰って行って節子の親たちにも会えると考えた。

六

「オヤ、たいそうさっぱりとなさいましたね。」

こういう意味のことをフランスの言葉で言って、だれよりも先に岸本の顔を見つけたものは、翌朝部屋の掃除にはいって来た旅館の給仕であった。

会う人ごとに岸本を見てふきださないものはなかった。パリの狭い在留者仲間で、外国生活の無聊に苦しんでいるような人たちは、「村」での出来事か何かのようにして、あるべきところにあるものがあった以前

の岸本の顔のほうがよほどよかったと、彼のために突飛な行いを惜しんでくれた。別れを兼ねてのカルタの会、コーヒー店での小さな集まりなぞがあるたびに、岸本は行く先で自分の顔の評を受けた。「ひげのあった時分の顔には、なつかしみがあった。なんだかひげを取ってしまったら、すごみが出て来た。」と言って笑うものがあった。「まあどうなすったんですか。ほんとに、びっくりしてしまいましたよ。そんなことを言っちゃ悪いけれども、岸本さんは気でもちがったんじゃないかとそう思いましたよ。」と言うものもあった。「惜しいことをした。やはり君にはひげがあったほうがいい。国へ帰るまでには是非はやして行きたまえ。」と言って忠告してくれる人もあった。

「岸本さん、ひげがなくなりましたね。何かそれには意味があるんですか。」

同じ旅館に泊まっている留学生が小旅行からもどって来て、それを岸本に尋ねた。この人は慶応出で岸本から見るとずっと年下ではあったが、何かにつけて彼の力になってくれた。

「昔、岸本さんは坊主におなんなすったとか――」とまたその留学生が男らしいまゆをあげて、岸本のほうを強く見て言った。「何かそれと同じような意味でもあるんですかね。」

さすがに、この人の言うことは鋭かった。岸本は返事に困って、

「自分の髪の白くなったのは鏡にでも向かわなければわかりませんがひげの白いのは見えて、心細くてしようがありません。もう一度書生の昔にかえろう。そう思って、君の留守にそってしまいましたよ――」これ以上のことは岸本には言えなかった。

さかんな若葉の緑がいつのまにか古めかしく黒ずんだ石造の町々の間へ青々とした生気をそそぎ入れるようにやって来た。岸本はひとりで旅館を出て、大学の建物のわきをある並木街へと取り、オステルリッツの橋のたもとまで歩いて行った。すこし曇った日で、四月らしい明るい日あたりを見ることはできなかったけ

れども、それがセーヌ川に近く行って見る最終の時であろうと思われた。岸本が初めてパリにはいったのは足かけ四年前の四月であったから、ちょうどパリを発つ前になってその時の若葉の記憶がまた彼の心に帰って来た。彼は今、石橋の下のほうをうずまき流れて行く清いセーヌの水を見る目でおそくも二月か二月半ばかりの後にはあの古いなじみの隅田川を見ることができるかと考えた時は、まるでうそのような気がした。

七

セーヌの河岸の中でも、オステルリッツの橋のたもとから古いノートル・ダムの寺院の見える中の島あたりへかけては岸本の好きな場所で、過ぐる三年の月日の間、彼はよくその河岸へ旅の憂さを忘れに来た。ふるさとなしには生きられないほど国のほうにあるいっさいのものの恋しかった時。一日二日の絶食を思うほど旅費も乏しく心もうら悲しかった時。行けるだけの旅を行き尽くして一番最後に呼んでみたいものは、子供の時分に死に別れた父の名でもなく、十二年も連れ添った亡き妻の名でもなく、なんといっても濁り気のなく感じやすい青年時代に知った最初の情人の名であったほど、それほど旅の心の閉じふさがってしまった時。そういう時に彼が見に来たのはこの水だ。相変らずセーヌは高い石垣の下のほうを冷たく音もなく流れていた。彼はそれを右手に見ながら、新緑の並木の続いた河岸の歩道に添うて、旅館のある町の方角へと歩いた。

フランスの旅に来てからこのかたのことがなんとなく岸本の胸にまとまって来た。彼はこの旅のはじめに国から持って来てフランス人の間に分けた植物の種のことを思い出した。あの中には中野の友人から贈られた茶の実ばかりでなく、築地のほうに住む知人が集めてくれた銀杏、椿、沈丁花、その他都合七種ばかりの東洋植物の種があったことを思い出した。あのみやげはことのほかフランス人にめずらしがられてブロッス

の老教授の手からあっちへ三粒、こっちへ四粒と分けられたが、ある日本美術蒐集家の庭には銀杏が生えたという話のあったことを思い出した。あの種の一部は植物園に移って、そこの主事から礼手紙の来たことを思い出した。その後戦争が始まってから植物園に近い教授の住居をたずねた時、岸本のほうからそのことを言い出してみると、教授はフランス人の癖らしく肩をゆすって、「この戦争では何もかもめちゃめちゃです。」と言ったことを思い出した。

せっかく遠いところから持って来た種もどうなってしまったか。それを思い出すと、異郷の土ともなり得ずに国をさしてもどって行こうとする自分の旅のことがいっしょになって岸本の胸の中をゆききした。東洋の果からやって来た彼のような人間はどこまで行ってもいわゆる異国の人で、結局この土地の人たちの生活にははいり得なかったのだ。自分らは芸術に行くのほかはない、それによってこの土地の人たちの生活に触れるのほかはない、こういう考えを彼はこのフランスの旅の最初から起したが、彼のように書籍とにらめっくらばかりしていて土地の婦人にも近づかないでは、どう知らない人たちの中へ行きようもなかった。女からはいるということが一番自然な道だ、と彼に話し聞かせたある旅行者もあった。それには彼はあまりに自分を責めすぎていた。あまりに自分の姪のことで深傷を負いすぎていた。

八

しかし、もう一度結婚ということのほうへ岸本の心を向けさせたのもこの異郷の旅であった。セーヌの河岸から旅館をさしてもどって行く道すがら岸本は三年前この旅に上って来たころと今この異郷を辞する時と、その行きとかえりの自分の心持の著るしい相違を思い比べながら歩いた。もともと彼の独身は深く女性を厭うところから来ていた。彼のように女性を厭いながら、彼のように女性を求めずにはいられなかったと

は。旅に来て孤独を守り形骸を苦しめるほど余計に彼はその自分の矛盾を思い知るようになった。周囲を見ると、妻のあるものは妻に会うことを楽しみに、妻のないものは妻を迎えることを楽しみにして、この無聊な外国生活から故国のふところへと帰って行かないものはない。「国のほうへ行ったら思うさま遊ぶぞ。」こんなことを言って、やるせない旅愁を紛らわそうとする旅行者もある。国のほうの言葉、国のほうの血、国のほうの人——求めても得られない遠い異郷の空にあって、彼はしみじみそれらのものありがたみを知った。もしこれから無事に故国にたどり着くことができたら、自分も適当な人を見つけて、もう一度家庭をつくろうし、自分のために一生を誤まろうとした節子にも新しい家庭の人となることを勧めよう、こう彼は考えるようになった。独身の生活から引き返して行って二度目の結婚を実行しようと思う心——その心でこそ、彼は再び節子を見ることができるとも考えた。

パリを発つ前に、彼の再婚説に賛成してくれた一人の美術家もあった。その人は国のほうにいる心あたりの婦人を思い出して、候補者として勧めてくれるほど世話好きであった。その人はまた彼のためにわざわざ国のほうへ手紙まで出しておいてくれた。

「どういうものが国のほうで自分を待っていてくれるだろう。」

そう思って歩いて行くと、これから彼の前途にひらけて来る実際の光景はまったく測り知りがたいもののような気がした。

屋並に商家の続いたサン・ミッシェルの並木街まで引き返して行くと、文房具を並べたある店の飾り窓が岸本の目についた。その店で彼は子供らのためにフランス風の黒い表紙のついた帳面や色鉛筆なぞを見立てた。狭いかばんの中へ入れて行くわずかのパリみやげでもいかに泉太や繁をよろこばすであろうと思った。それをさげて旅館へもどると、ちょうど年とったフランスの婦人のたずねて来るのに会った。黒い帽子、黒い着物、黒い手ぶくろ、いっさい黒ずくめだ。顔にま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong